

# 竹枝詞

白居易

瞿塘峡口水煙低

白帝城頭月西向

唱竹枝の声咽処到

寒猿閣鳥一時啼

【作者】白居易(七七二〜八四六年)、中唐の詩人。字は樂天。号は醉吟先生・香山居士。弟に白行簡がいる。鄭州新鄭県(現河南省新鄭市)に生まれた。子どもの頃から頭腦

明晰であつたらしく、五〜六歳で詩を作ることができ、九歳で声律を覺えたという。彼の家系は地方官として役人人生を終わる男子も多く、拔群の名家ではなかつたが、安祿山の乱以後の政治改革により、比較的低い家系の出身者にも機会が開かれており、八〇〇年、二十九歳で科擧の進士科に合格した。三十五歳で盩厔県(ちゆううちつけん、陝西省周至県)の尉になり、その後は翰林学士、左拾遺を歴任する。このころ社会や政治批判を主題とする「新樂府」を多く制作する。八一五年、武元衡暗殺をめくり越権行為があつたとされ、江州(現江西省九江市)の司馬に左遷される。その後、中央に呼び戻されるが、まもなく自ら地方の官を願ひ出て、杭州・蘇州の刺史となり業績をあげる。八三八年に刑部侍郎、八三六年に太子少傅となり、最後は八四二年に刑部尚書の官をもつて七十一歳で致仕。七十四歳のとき自らの詩文集『白氏文集』七十五巻を完成させ、翌八四六年、七十五歳で生涯を閉じる。

【備考】

竹枝詞とは、民間の歌謡のことで、千余年前に、楚・四川東部(巴)・湖北西部に興つたものといわれている。唐代、楚の国は、北方人にとっては、蛮地でもあり、長安の文人には珍しく新鮮に映つたようだ。そこで、それらを採録し、修正したものが劉禹錫や、白居易によつて広められた。それらは竹枝詞と呼ばれ、巴渝の地方色豊かな民歌の位置を得た。下つて唱われなくなり、詩文となつて、他地方へ広がりをみせても、同じ形式、似た題材のものは、やはりそう呼ばれるようになった。現在も「竹枝」として、頭に地名を冠して残っている。竹枝詞をうたうことは、「唱竹枝」といわれ、「唱」が充てられた。白居易に「怪來調苦緣詞苦、多是通州司馬詩。」とうたわれたが、ここからも、当時の詩歌の実態が生々しくと伝わってくる。後世、詩をうたいあげてことを「賦、吟、詠」等というのと大きく異なる。竹枝詞という呼称は、詩題に似ているが違ふものである。強いて言えば、形式を表す点では詞牌に列するものであり、実際にその扱ひを受けているものである。